

あとがき

1996年は、ヴィゴツキーの生誕100周年であったと記憶している。ヴィゴツキー論への関心が高まるこの記念すべき時の前後に、本論文の作成に着手し、ここに、文化-歴史理論に依拠する一編の数学教育学の研究論文を提出することとなった。1984年に、筆者が文化-歴史的活動理論を視点とする修士論文を筑波大学教育研究科に提出して以来、今日まで約16年間、ヴィゴツキー論は真夜中の大海に輝く北極星のように、わたしの思想的な羅針盤であり続けた。

本論文では、ヴィゴツキーの発達論にラカトシュの数学論を組み合わせた、「社会数学的活動論」の構築を試みた。ラカトシュ論との出会いは、古藤怜教授(現在上越教育大学名誉教授)ならびに大学院の先輩である関口靖広助教授(現在山口大学)の研究を通してであった。しかし、筆者の学部時代(金沢大学)の数学的経験、ことに指導教官の久志本茂教授(現在福井工業大学)から受けた恩恵は、ラカトシュ論の本質をついたものであった。また、応用数学(OR)の分野から数学教育への道を開いて下さったのも、恩師久志本教授であった。

数学教育という未知の世界で、未熟な筆者を今日まで導き、育てて下さったのは、三輪辰郎教授(現在筑波大学名誉教授)、指導教官の能田伸彦教授、そして清水静海助教授であった。三輪教授は、内外の研究水準の視野から、研究の新しさ、論の首尾一貫性、具体例の重要性に関して、つねに厳しくかつ的確な御指導を下さった。指導教官の能田教授には、学位論文作成の御経験に基づき、いたらない筆者の研究に対して根気強く御指導下さった。時には、入院中の病室においてまで論文指導をして下さり、大変な心労をおかけした。才乏しく無能な筆者が論文を作成できたのも、16年余御指導下さった能田教授のお蔭である。清水助教授は、数学教育の実践の改善に理論的に寄与する研究を強調され、特に算数・数学的活動の本質と教育的意義を御指導下さった。また、筆者をロシア研究に導いて下さり、ソ連に留学する機会も与えて下さったのは、川野辺敏教授(現在常葉学園大学)ならびに小島弘道教授、そしてソ連教育研究会の諸先生方であった。

本論文の審査に関わり、山本恒夫教授、長洲南海男教授、田中統治教授、そして大高泉教授には、大変なご迷惑をおかけした。ご多忙の中、筆者の拙い構想を検討して下さい、貴重な御指導を下さった。特に、ラカトシュの科学哲学と調査研究法に関しては山本教授より、授業過程の社会学的研究に関しては田中教授より、そして科学教育学に関しては長洲教授と大高教授より多くの御指導を賜った。本論文に洗練された部分があるとするれば、それは能田、清水両先生を初め、諸先生方の御指導のお蔭である。しかし、筆者のいたらなさ故、諸先生方の御指導を咀嚼することに時間を要し、山本教授ならびに大高教授には、特段のご迷惑をおかけすることになった。本論文をここに提出できるのは、ひとえに、これらの先生方そしてここでは御名前を挙げられなかった多数の先生、先輩、同僚、後輩の方々の建設的な御指導、助言、協力、議論、激励のお蔭であり、皆様に、衷心より感謝申し上げたい。

私事で恐縮だが、わがままな生き方を許してくれた両親、家族に心からお礼を述べたい。